星野富弘　詩画集「種蒔きもせず」所収

2020 年 4 月 19 日　説教「患難さえも」

ローマ人への手紙 5 章 1~5 節

受難週から復活節を経ての、御言葉の学びです。

1．基本的には恵みによって生かされている（1～2 節）

①神との平和（1）**「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」**
罪人は一方的な恵みによって、何の価値もないにもかかわらず、義と認められるのです。それはキリストの贖いがあるがゆえです（ローマ 3:23-24）。それでは、私たちはどのような原理で義と認められるのでしょう。行いでしょうか。そうではありません。ただに信仰によって義と認められるのです（3:27）。もちろんイエス・キリストを信じる信仰によってです。義と認められた者たちは、断絶関係にあった神との関係に、キリストによって和解を与えられた者たちであります。キリストによってこそ、神との平和を与えられていくのです（3:10-11）。

②いま立っている恵み（2）**「またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに、信仰によって導き入れられた私たちは、」**「いま私たちが立っているこの恵み」というのは、どうしようもない罪人である者たちが、義と認められたというという恵みのことです。それは、確かめきれないほどに、大きな恵みなのです。つまり、私たちは自分の罪を過小評価していますし、自分の罪について気付いていない部分もあります。さらには、自分が長所だと思っている点についてですら、罪が渦巻いているということになかなか気づかないのです。しかし、です。そんな愚かな者達に、恵みによってキリストは、それらのすべての罪を背負って十字架に上ってくださったのです。私たちができることは、キリストを一心に信じることだけなのです。そのことによって救われていくのです。

③神の栄光を望んで喜ぶ（2）**「神の栄光を望んで大いに喜んでいます。」**
そうして信仰に導かれた私たちは、何を喜ぶのでしょう。それほどにして、救いを与えてくださったのですから、それをもたらしてくださった神を喜び、主に栄光があることを望んで、喜ぶのです。また、神に栄光があることを望めることを、大いに喜ぶのです。

2．患難、忍耐、練られた品性、希望（3～4 節）

①患難さえも（3）**「そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、」**「患難さえも喜んでいます」を新共同訳では「苦難をも誇りとします」と訳しています。原語にあたると、どちらにも訳せます。それは 2 節の「喜んでいます」にも言えることです。患難をも喜ぶという訳の方が、メッセージの全体の流れから言っても繋がっていきます。即ち、その後に来る「患難が忍

耐を生みだし」以下の文節にも自然につながります。患難は苦難とも訳されるように、苦しみ、悩みをもたらし、その集合体、個人にとっては試練になります。しかし、患難に会う時に、信仰があれば、祈りつつこらえる力が備えられます。忍耐する力が生まれのです。

②忍耐は練られた品性を（4）**「忍耐が練られた品性を生み出し、」**忍耐というのは、待つ心でもあります。今の事態を受け入れることは、この後、起こることについて、委ねる信仰をも必要になってくるのです。やせ我慢では、持ちこたえられません。忍耐する経過には、否定的な思いや、罪の思いも生じるかもしれせん。しかし、信仰によって待ち続ける心をいただいた後には、練られた品性が生み出されてくるのです。口語訳や新共同訳では「練達」とあり、言葉の響きは良いですね。

③練られた品性は希望を（4）**「練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。」**練られた品性とは、患難によって揉まれ、信仰によって練り清められた性質です。ガラテヤ書にある御霊の実（5:22-23）にも重なるでしょう。この品性が培われてくると、その人の内において希望が生み出されてくるのです。もちろん、具体的な希望にあふれた出来事が生み出されることもあるでしょう。

３．不変の希望は（5節）

①この希望（5）**「この希望は失望に終わることがありません。」**具体的な希望にあふれた出来事も喜びをもたらすでしょう。私たちは大方、そこに安心し、それを希望というのです。しかし、もっとも深く揺ら」ぐことのない希望は内なる希望です。その希望は決して失望に終わることがありません。見える希望なら、それを失った時に、一気に失望へと変わってしまうのです。しかし、永遠につながる希望であれば、事柄に変化があっても不変なのです。

②聖霊により（5）**「なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、」**見えない永遠の希望というものは、肉の性質からはでてきません。生まれながらの性質では、好ましい事態が起きなければ、それは喜びへと結びつかないからです。しかし、聖霊が働く時に、事態に見える変化がなくても、私たちのうちに、見えざる希望をもたらすことになるのです。明るいものです。光と言っても良いでしょう。

③神の愛が私たちに(5)この希望は失望に終わることがないのですが、それは聖霊によってもたらされます。そして、その保証となるものが備えられています。それは神の愛（アガペー）です。神の愛が私たちの心に注がれることによって、私たちの心に神の支配が備えられ、霊的に価値あるものを、重視する心が生まれてくるのです。霊性が肉の心に勝利するのです。真の希望を希望とし、そこに安心と喜びを見出す信仰が宿されるのです。

《結論》　今朝、私たちは大変異例のかたちで礼拝をささげています。ある人は、今までとお同じ教会でささげています。しかし、実際はいるべき人たちがそこにいません。また、ある人たちは、家庭で礼拝をささげていることでありましょう。それは、コロナショックといっても良い理由からであります。

このような状況ではありますが、今朝は、ローマ人への手紙 5 章から学んでいます。ローマ人への手紙は、救済論が語られているのですから、一部分だけを切り取って学ぶのでは、本来の迫力はなかなか伝わってこないのですが、現在のような状態ですから、事態を受け入れ、いきなり一部分をつまみ食いのようにして取り組みます。

今朝は、特に 3～4 節を結論のようにして教えられたいのです。口語訳では「患難、忍耐、練達、希望」と覚えやすかったのですが、新改訳では「練達」は「練られた品性」です。ともあれ、今私たちは、コロナウィルス感染の拡大という共通の患難の中にいます。それは私たち生活をおびやかし、教会の礼拝も公式には休まざるを得ない状態となってしまっています。こんなことはこの教会にあっても、初めてのことです。それでも、私たちはまずはこれを受け入れるしか、致し方がないのです。そして耐えなければならないのです。知恵が必要です。体力も必要でしょう。でも、何といっても信仰が必要であります。もちろん、恵みがまずはあってのことですが、私たちは主によりすがりつつ耐えることがまずは求められます。

最後のページに星野富弘さんの一つの詩画を印刷しておきました。一瞬にして頭から下の運動能力を失った星野さんが、長い経過の後に取らされたのは 10 グラムの絵筆でした。口にくわえて絵と詩を描き始めたのです。それから 45 年以上の営為は恵みとでもいえましょう。星野さんは信仰も与えられて、神を仰ぎつつこの働きを続けてきたのです。「神さま本当にありがとう」という言葉に表れています。

患難の時代には、私たちはその後のことは見えず苦しいのです。つらいのです。悲しいのです。しかし、祈りつつ耐えさせいただいた後には、練られた品性が生み出されるのです。霊的成長ともいえましょう。魂の奥底からの喜び、希望、愛が感ぜられるようになるのです。

私たちは、見えるかたちでの喜びや希望や愛を求めます。もちろん、それも主は備えてくださると思います。しかし、信仰者として、本来的に求めるべきところは、キリストにある永遠の喜びや希望や愛でありましょう。それこそが不動のものだからです。

現在私たちを取り巻いているマイナスは、必ずやプラスになると信じましょう。「苦しみにあったことは、私にとってしあわせでした」（詩篇 119:71）と告白できる日が来るでしょう。終わりの日を見据えつつ、十字架と復活の主イエス・キリストを仰ぎつつ、この患難

の日々を過ごしていきたいのです。（＊祈りをもって結びましょう）。